

やがて熊本に着いた。両親や妹達みな喜んで迎えてくれたが衰弱した私共母子三人の姿をみて悲喜交々の涙、滂沱だった。

平和をかみしめながら生きている

宮崎県 高橋 ミキヲ

私は満州国東満総省牡丹江市より引き揚げた者ですが、その当時のことを思う度に筆舌に表されないほど胸が一杯になるのです。一変して敗戦国民となり、ソ連軍、国民軍、中共軍に脅かされ財産も名誉も剝奪され、引揚げ者となり親子三人どうして暮すのか心細い終戦当時でありました。

昭和十一年八月、亡夫春樹と結婚し、昭和十三年一月に長男が生れ、十月に南郷小学校から満州牡丹江市の聖林小学校勤務のため、親子三人と実妹の四人で日本を後にしました。着任した聖林小学校は、建築中でしたが、職員住宅は完成していたので、落ちつくこと

ができましたが、淋しい所で不安な毎日でした。

昭和十四年七月次男が生れ、昭和十六年五月には三男を出産しましたが、その三か月後に長男と次男がアメルバ赤痢にかかり、突然の発熱を起こし、隔離病棟に入院しました。四十日経過した九月三日、長男は死亡、次男はどうか命をとりとめました。主人は三叉神経痛を病んだ他は元気で、全満小学校放送などもしていました。

昭和十九年二月長女誕生、主人は昭和二十年四月、教頭を命ぜられ、多忙な毎日でした。六月に学校職員バレー大会があり、夫はその競技中に腸捻転をおこし、急遽、満鉄病院に入院しました。一か月余で退院はしましたが、なかなか元氣になれず、通院をしていました。

八月十一日突然の避難命令が出ました。なんの説明もないまま、着のみ着のまま、食べものだけを袋に入れ、指令を待ちました。それ以前に、主人に召集令状がきて、兵事部に向きました。兵事部では、病人であることが判明し、数時間後とほとぼ歩いて帰りまし

た。学校職員の家族一部約六十人ほどを指示し、夜八時頃、行く先もわからない道を皆で励ましあいながら行列して歩きました。次第に疲れが出て、ただ黙々と歩きましたが、着いた所は新ジャンという駅でした。

そこで無蓋貨車に乗り込み出発しましたが、雨が降っても、ごみがあつても、屋根のない貨車のこと、病気になるのがふしぎなくらいでした。何日もかかつて、やっと有蓋貨車に乗りかえることができましたが、窓はとぎされ、こんどは蒸し風呂の中のように、どの顔を見ても、皆不安と疲れといらだちで、時間だけが長々と続いてゆく思いでした。窓の板を誰かが破ってくれたので蘇生の思いでした。

吉林の一つ手前の新古という駅で降ろされました。

そのときは小学校に宿泊することができて、どんなにか気持が安らぎました。ここで終戦となり、日本が敗けたことを知りました。その時は何も考えられず、ただただ涙があふれてくるのを、押さえることができませんでした。

それからがたいへんでした。一日も早く帰国したい

気持から、帰国できる方角へ何千人という同胞が移動するのですから、平常の精神ではとてもかかなうものではありませんでした。病気になる、落伍して、取り残されてゆく人も多数にのぼりました。そういう中で、夫の体は、弱りはて歩行も困難となり、ついに十一月二十八日、不帰の人となりました。

翌年の三月、父親の後を追うように、長女も他界しました。栄養失調です。看病疲れか、私も妹も発疹チフスにかかり、三男も栄養失調で三人揃って、隔離されました。次男だけは元気でしたので、知人に預かってもらいました。幸いに三人ともどうにか元氣を取りもどすことができました。

亡くした二人は、諸先生の手で遺骨にし小さな箱に入れてきました。

いよいよ引揚げの許可が下りましたが、三男は栄養失調で、歩行できないので、私が背負わねばならず、元気な次男には遺骨を持たせ、妹を付き添わせて、先に出発させ、私は一か月後に出発しました。遺骨を首から下げた次男と別れる時は、二度と会えないかもし

れない断腸の思いでした。

一月遅れで、三男を胸に抱いてコロ島から船に乗り込み、佐世保港に上陸しました。三男は栄養失調のため三歳になっても歩けない状態でした。船の中で死者が出るたびに水葬をしました。三男がいつ、このようになるかと思うとまたまた心がかきむしられる思いで、わが子を必死に勇気づけ励ましつづけ、日本の上陸が現実となった時の嬉しさは、いうに及ばないものがあります。

帰郷後、私は市職員に採用していただき、次男も三男も現在は立派に社会人となりました。昭和五十一年三月末に私は市役所を退職し、長年の仕事にピリオドを打ち少しのんびりしようと思っていた矢先に、昭和五十二年一月脳血栓のため病床に伏し、家族や周囲の人々の看護のおかげで一命を取り止め、病後は三男の家族と共に生活しております。平和こそ幸せの基本だと思つて、時々通院しておりますが、朝夕の散歩を日課として暮しております。

母の終戦から引揚後の辛酸労苦の 一生を省みて

北海道 佐藤 康子

昭和十四年、父佐藤軍治の兄である喜作が満州である事業をしているので来ないかと言うので、北海道の長沼町で農業をしていた父が長沼町をあとに、満州に一家が移住して、兄と共同で事業を始めた。

七、八人の満人を雇い、母は一生の中で一番良い月日を送っていたのではないかと思う。やがて戦争が始まりそのため事業も思わしくなくなつて来て、父は満鉄に入社し北海道出身の白井三好さんと友人になつた。

昭和二十年八月になり戦争は激しさを増し、満鉄から女子供、老人に引揚げの指令があり、母は十一歳の長男、七歳の次女、四歳の次男、二歳の三女（私）生れたばかりの三男を連れて、引揚列車に乗った。その